

巻頭言

専門用語と仮名

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

昭和53年、中国の南京大学の中の師範学院を視察したとき、漢字を横書で書いているのを見て、びっくりして質問したところ、洋書の影響で、知識人の横書は当たり前で、何の不都合も感じないという回答に、日本人の私の方が、頭が古いのかなと、自らを疑って、帰ってきたものである。

戦後、わが国でも、簡略文字が取り上げられ、仮名遣いも改まり、学術的な文章は横組みの書き方に移行しつつあるが、それと同時に、“当用漢字”なるものが制定されて、一応それが普及した。当財団の、「いも類振興会」とか、「いも類振興情報」等の仮名書きも、一応この趣旨に添った扱い方である。

然し、筆者は、この種の文字の用法には、かねてから疑問を抱き、かつ、不愉快に感ずる次第である。

もともと、漢字というものは、事物や意思を表現するばかりでなく、目で見る視覚で、一瞬のうちに、その字面（じつら）の抱懐する意味を伝達する機能をもっているものである。それが、「ばれいしょ」とか、「甘しょ」と書かれると、馬鈴薯とか、甘藷とかを意識して、いったん頭の中で翻訳した上で、事物の概念を思い浮かべないと、理解できない不便さがある。印刷の工程でも、馬鈴薯という三字を拾えばいいものを、「ばれいしょ」という五文字を拾い、五文字を植字しなければ

ならない。

茲では、繁雑になるので引用はしないが、現在、甘藷、馬鈴薯の病虫害の用語等にいたっては、漢字そのもののもつ意味を利用し、造語した専門用語が無数に慣用されている。従って、これらの専門用語を仮名で表記されると、なんのこともか、まったく理解することができない。

現代は、過渡期だからまだ幾らかいい。これがあと30年も経って、「ばれいしょ」という使用文字だけで育った少年・青年が成年・老年になった頃には、仮名の「ばれいしょ」を解釈する漢字が添えられるようにならぬとは、誰も保証できない。

終戦後、仮名遣いを改め、文字を簡略化したことは、それなりに意義があったが、漢字文化の中にありながら、使用文字を制限して、仮名書にしたことは、無用の混乱を招いたことで、却て、漢字文化を歪曲した。

本誌は公文書でもなければ、公用文書でもない。従って、当用文字の制約を受けなければならぬ理由はない。もちろん、筆者の方々の意思や、方針は尊重しますが、成るべく、漢字はそのまま使用して、無理に当用漢字外だと称して、漢字を仮名書きにする煩雑は、避けたいものである。別に、多くの共鳴者を同伴したいという意味もないが、将来の文化のため、考慮して欲しいと思う。